

インタビュー  
コーナー

琉球の地のエネルギー、  
パワー、あたたかさが大好きです。

末永くどうぞ宜しく御導  
き下さい。



琉球大学医学部 第二内科 教授  
益崎 裕章 先生

Q1. この度は、琉球大学医学部器官病態医科学講座内分泌代謝内科学分野教授ご就任おめでとうございます。ご感想と今後の抱負をお聞かせいただきたいのですが。

2009年10月1日付けで琉球大学第二内科教授に着任致しました益崎裕章で御座います。沖縄県医師会の諸先生方に謹んで御挨拶を申し上げます。琉球大学医学部内科学教室は第二内科がその礎を築き、のちに第一内科（現：藤田次郎教授）と第三内科（現：大屋祐輔教授）が枝分かれして立ちあげられたと伺っております。沖縄県内外に数多くの優れた人材を輩出し、沖縄県の医療に貢献してまいりました伝統と歴史に育まれた名門教室を引き継がせて戴く御縁に恵まれ、大きな責任と大きな未来を前に、誠に身の引き締まる思いで御座います。着任から3カ月半が経過致しましたが、日々、沖縄の人々の温かさ、純朴さ、優しさに癒され、日本人が置き忘れてしまった大切なものが沖縄の地にしっかりと残っていることに感激し、素晴らしいところに赴任させて戴いたことを心から嬉しく思い、感謝、感謝の毎日を過ごしております。

琉球大学第二内科は初代三村悟郎名誉教授、第2代高須信行名誉教授の卓越した御指導のもと、内分泌代謝内科、循環器内科、血液内科の

各分野にわたる臨床、教育、研究を担当し、沖縄県の医療、医学教育、医学研究において重要な役割を果たしてまいりました。第3代教授を担当させて戴く私の役目は権力ではなく“徳”で教室を纏め、教室に集う先生方を幸せにすること、沖縄県医師会の諸先生方との親睦、融和を深め、人材・医療・学術的交流を促進していくこと、新時代の要請に応える質の高い医療と医学教育を提供し、沖縄県の皆様に喜んで戴くこと、そして、沖縄の地でこそ実現できる独創的研究を展開し、その成果を日本・世界に発信していくことではないかと考えております。

私は平成元年に京都大学医学部を卒業し、平成4年に京都大学第二内科大学院博士課程に入学（井村裕夫前京都大学総長、中尾一和京都大学第二内科教授）、平成8年に大学院を修了、医学博士を取得しました。その後、平成12年からの3年間、米国のハーバード大学医学部に留学致しました（ジェフリー・フライヤー教授；現ハーバード大学医学部長）。この間、一貫して代謝・内分泌病学の臨床、教育、研究に携わり、特に、脂肪細胞の機能調節や視床下部のエネルギー代謝調節に関わる新規の分子メカニズムの解明、さらに、肥満症・メタボリックシンドロームに対する新しい診断法・治療法の開発研究に従事致しました。大講座時代の京都

大学第二内科には内分泌代謝内科のみならず動脈硬化・高血圧グループ、循環器内科、腎臓内科、血液腫瘍内科、膠原病内科の各グループが互いに切磋琢磨しており、内科学全般を俯瞰する多くの機会に恵まれたことは私にとりまして誠に幸運でありました。日本内分泌学会を創始した教室から着任致しました者として、沖縄県における内分泌・代謝内科領域の医療、医学教育、医学研究の発展と隆盛に貢献できればと願っております。

琉球大学第二内科着任の年、2009年は私にとりまして医学部卒業後20年目の節目の年であったと同時に、米国では史上初の黒人大統領が誕生し、我が国では政権交代が現実のものとなるなど変革が地球規模で大きなうねりとなった年でもありました。激動する医療環境の中にあっても変化を恐れず、新しい海に漕ぎ出して行く勇気を失わず、常に進化力とブランド力を持ち続ける“輝く医師”、“人格・実力相まった優れた医療人”を育ててまいりたいと願っております。第一内科の藤田教授、第三内科の大屋教授、御二人の素晴らしい先輩教授の御指導を戴きながら琉球大学の3つの内科が仲良く力を合わせ、和と懇親を重んじ、開かれた内科学教室、アクセスしやすい内科学教室、親しみやすい内科学教室を創ってまいりたいと存じます。沖縄県医師会の諸先生方におかれましては新生琉球大学第二内科への変わらぬ御引き立てと倍日の御鞭撻を心より御願い申し上げます。

**Q2. 益崎教授が目指す講座運営の方針等について差し支えない範囲でお聞かせください。**

希望に溢れた未来を開拓し、内外に存在感を示す教室を創っていくためには今後とも沖縄県医師会の諸先生方の御指導と御鞭撻が不可欠であります。新生琉球大学第二内科では“等しく、皆が幸せに！”をモットーとして、個性を尊重し、ひとり、ひとりが望むキャリア・プランを実現していく多彩な選択肢を用意しております。皆さんに高度医療人としての誇りと自信

を持って戴き、歓声がこだまし、ワクワク感のオーラが放射する温かい教室・輝く教室を創ってまいります。意欲あふれる若き医師、若き医学研究者、リサーチ・コーディネーターの皆様のお参画を心より歓迎し、教室員一同、御待ち申し上げております。沖縄県医師会の先生方におかれましては、折にふれて周りに居られる若き医師の皆さんに新生第二内科のコンセプトを御話戴きまして、御関心のある皆様には是非、気軽に教室まで御連絡を戴きたく、御紹介の程、何卒宜しく御願い申し上げます（電子メール：ikyoku@ryudai2nai.com 電話：098－895－1145）。

講座運営の要諦は人間磨きと人育てにあると考えております。良い仕事を積み重ねていく根本は“人間性の良さ”にあります。第二内科では教室員のチームワーク、信頼、絆を重視し、(1) 良いことを想い、良いことを行う、(2) 喜ばれることを喜びとする、(3) 互いの良い点を褒めあう、(4) 皆でちからを合わせて励ましあい、助け合い、正しい目標に向かって進んでいくことで当初には予想も出来なかったような素晴らしいことができるんだという“人生や世界に対する信頼感”を高めてまいります。どんな綺麗な花でも水を遣り、愛情いっぱい可愛がって育てていかないとやがては枯れてしまいます。人育てもまったく同じと考えます。

診療・教育領域と致しましては昨今、沖縄県で特に増加が著しい糖尿病や肥満症をはじめ、間脳下垂体疾患、甲状腺疾患、副腎疾患、骨カルシウム代謝異常、性腺疾患など、内分泌代謝疾患のスペシャリストを養成する内分泌代謝内科グループ、難治性不整脈に対する高度先進医療を担当する循環器グループが活動しており、加えて、つい最近、概算要求が承認された琉球大学医学部骨髄移植センターの稼働に伴う血液内科の再生を目指して鋭意、陣容を準備中であります。また、従来、琉球大学医学部附属病院の3つの内科学教室の中で担当科が空白となっておりました膠原病内科に関しましても今後、第二内科で担当していきたいと考えており、構

想を進めております。

琉球大学第二内科は日本内科学会、日本糖尿病学会、日本内分泌学会、日本甲状腺学会、日本循環器病学会、日本老年医学会の専門医、研修指導医の養成・研修施設として認定されており、日本肥満学会の“肥満症専門診療施設”にも沖縄県で唯一、指定されております。また、琉球大学第二内科では“女性が輝く教室”をキー・コンセプトとして、育児・家庭と女性医師としてのキャリア・アップやブランディングを両立させるため、“女性医師による女性外来”や“パート医員制度”などの斬新な仕組みを用意し、志を持って医師になられた優れた女性医師が生涯にわたって沖縄県民の皆さんに役立つだけけるシステムを構築してまいります。琉球大学第二内科学教室が沖縄県医師会の諸先生方、沖縄県民の皆様へ愛され、心の拠り所となる温かいプラットフォームであり続けられるよう誠心誠意、精進してまいります。

**Q3. 近年、メジャーといわれている内科や外科を志向する若い医師が減少しているようです。内科を専攻する者としても憂慮するところですが、この事に対するいわゆる‘対策’・‘御意見’をお伺いします。**

医療の原点は“個々の病気を診るだけではなく、個体の中で生じている疾患を全身の中で捉える、患者さんの背景因子を含めて病気を総合的に診ることにある”という概念に大きな異論はないと思いますが、若い医師を取り巻く現在の環境は玉石混淆の情報過多に陥っており、ともすると自分の心の声に耳を澄ませ、自分で考え、自分で意思決定していくという習慣が希薄となり、激変を続ける医療環境の中でいたずらに先行きの不安を煽られ、小さく纏まってしまいう傾向に席卷されているように見受けられます。“メジャー離れ現象”の基本対策と致しましては、まず、医学部教育の早い段階から“病気を診るのではなく病めるひとを診るのが医師の本分である”という基本姿勢を徹底して教育すること、さらに、医師という職業が人生を賭ける

に値する働き甲斐に溢れた素晴らしい職業であるということが多様なチャンネルを通して教えていく、示していくことが重要であります。メジャー領域の先輩医師を見て、若い医師達が“私も是非、先生方のようにになりたい！”という憧れを抱くかどうか…。そういう意味ではソクラテスの時代から繰り返されてきた“今どきの若い者は…”という嘆きに留まらず、“私達はどのようなのか？後輩医師からの憧れの対象となるような魅力的な医療人たり得ているのか？”という謙虚な自問、振り返りも不可欠でありましょう。先輩医師が誇りと自信にあふれ、生き活きと輝いている姿を見せることは若手医師の進路決定において極めて重要な鍵を握っております。

琉球大学第二内科が担当する内分泌・代謝領域の疾患は元来、臓器間の機能連関や恒常性維持のために備わっているホルモン（内分泌）、神経、免疫というシステムが病的に破綻した状態と考えることが出来ます。糖尿病も肥満も高血圧症も皆、同様です。“全身を診ることを通して個々の病気の本質に迫る”という姿勢を教えるという意味において、例えば、内分泌代謝病学の真髓や真骨頂を医学生や初期・後期研修医の皆さんに未来展望を持って魅力的に、面白く伝えることが出来れば状況はかなり好転するのではないのでしょうか。世界屈指のパワー・スポットである沖縄の土地柄、風土、そして沖縄の優れた研修システムの魅力に引き付けられ日本各地から多くの初期・後期研修医が沖縄に集まっていますが、研修後も沖縄県に残る方は残念ながらそう多くはないと伺っております。内科診療は医療の中核、基本であり、内科学は医学の王道であります。若い医師をメジャー系へと導く試みが実を挙げるには琉球大学医学部と沖縄県医師会の効果的な連携が非常に重要な意味を持っており、私も精一杯、汗をかきたいと考えております。

**Q4. 沖縄県は、他府県に比し肥満・糖尿病が多く、特に男性の平均寿命が25位と低下し問題となっております。来県されて間もな**

いところですが、これに対する御意見・御提言をお伺いしたいのですが。

エイズや新興感染症と並び、糖尿病や肥満が世界を巻き込むパンデミックとなりつつあります。インスリンやレプチン、アンジオテンシンIIなどのホルモンは過酷な進化の過程で飢餓に対する生体応答や早魃に対抗する水分・電解質の保持のためなくてはならないサバイバル・システムとして機能してきましたが、高脂肪食、塩分過剰、運動不足、過剰ストレスに曝される現代社会にあっては肥満症の病態形成に関わる悪役に豹変しています。フランス料理が始まって僅かに200年、環境の変化に適応して遺伝子の変容するには少なくとも10万年かかることを考えると人類は当面、糖尿病・肥満症の災禍に対峙せざるを得ないと言えます。アメリカ型の食とライフスタイルが流入した結果、世界に冠たる長寿の島、沖縄でも僅か一世代の間に平均寿命が急落するという異変が生じておりますが、この“沖縄クライシス”を招いた複雑要因を分子栄養学、統合生理学、分子疫学などの視点から解き明かし、近未来の日本クライシス、アジアクライシスをうまく回避させることができるかどうか？このテーマは琉球大学第二内科に着任した私に課せられた“遣り甲斐に満ちたミッション”であると直観しております。実に壮大なプロジェクトであり、目的の達成のためには沖縄県医師会、行政、保健、栄養、教育現場の諸先生方と琉球大学との効果的連携、タスクフォースの整備が不可欠であると考えております。

私は糖尿病・肥満症の病態解明と新規治療法開発のヒントを長い間、受動的なエネルギー貯蔵庫と考えられてきた脂肪組織の中に見出してきました。健康人の体脂肪率が20～25%であることを考えると、脳を含む全身に向けて多彩なバイオシグナルを発信する脂肪組織は“生体最大の内分泌臓器”と考えることができます (Diabetes 1995, JCEM 1997, Nature Medicine 1997, Diabetes 1999, Diabetes 1999, J Clin Invest 2000, J Clin Invest

2000)。脂肪細胞ホルモン、レプチンを介して脂肪組織が視床下部に伝える“あなたはこれ以上食べなくても良い”という情報は人工的な高脂肪食の前にはいとも簡単に攪乱されることが明らかとなり、脳における摂食シグナルの全容解明とレプチン抵抗性の解除法が次世代抗肥満治療薬の標的となっております (Diabetes 2005, Cell Metabolism 2005, Cell Metabolism 2007)。また、過栄養やストレスは脂肪組織のコレステロール代謝を活性化させ、内臓脂肪の増加や異所性脂肪の蓄積を加速させることが明らかとなっております (Science 2001, J Clin Invest 2003, Diabetes 2004, Endocrinology 2007, Am J Physiol 2009, Am J Hypertens 2010)。遺伝子操作動物における研究成果はヒトの肥満脂肪組織でも既に検証されており、標的となる酵素阻害剤の開発がメタボリックシンドローム治療薬として世界規模で進められています。私が今日まで取り組んでまいりました医療・医学研究のあゆみが“沖縄クライシス”の解決に向けた推進力のひとつとなるよう、誠心誠意、精進してまいりたいと思います。

**Q5. 県医師会との連携等に対する御意見、ご要望がございましたらお聞かせください。**

“沖縄クライシス”をはじめ、沖縄県が直面している深刻な医療問題の数々に対していかにして最適解を導き出すか、いかに沖縄県の医療を向上させられるか、その成果をいかにしてオールジャパン、インターナショナルに発信できるか？…今、内外から熱い視線と注目が寄せられております。高邁な理想のもと、斬新な枠組みで沖縄県医師会の先生方と琉球大学第二内科の連携をスタートするとすればまさしく今がベストタイミングであり、周辺の諸状況も待たなしの緊急的事態と言えます。ピンチが最大のチャンスであることは歴史が教えるところであります。医療・学術の交流、意見交換の場を積極的に設け、双方に益する“ウイン・ウインの関係”を鋭意、構築してまいりたいと願っております。

スーパーローテーション研修制度の“負の影響”として、初期診療偏重や専門医の取得に過剰な価値が置かれ、反面、学術的活動の軽視という風潮が広がっております。その結果、学会や研究会の場で論理的に症例報告が出来ない若い医師、論理的な議論や意思決定が出来ない若手医師が急速に増えていることが憂慮されております。今後、琉球大学第二内科と沖縄県医師会の重要な連携のひとつは、一定の時期に若い医師を大学で御預かりしてしっかりと教育し、自分で考え、自分で問題解決する学術的トレーニング（医学博士の取得を含む）を積んだのち、再び、一線臨床の場に御返しするという好循環を構築することであり、人材育成は100年の大計であり、琉球大学と沖縄県医師会の連携によって臨床の各分野における優れたリーダーを着実に育てていく体制作りは急務の課題と感じております。

診療におきましては大学病院での入院・診療が望ましい患者さんの積極的な御紹介を何卒宜しく御願ひ申し上げます。BMIが35を超え、減量困難性や種々の健康障害を併発されている超肥満の患者さん、1型糖尿病を含む血糖コントロール不良の患者さん、女性医師の診察・診療を御希望になる女性患者さん向けの女性医師による女性外来への御紹介（骨粗しょう症、月経不順、更年期症状、甲状腺疾患、動脈硬化性疾患など）、成人成長ホルモン分泌不全症やクッシング病、下垂体機能低下症、ア Cromegaly、下垂体炎など種々の間脳下垂体疾患、種々の甲状腺疾患、アルドステロン症やクッシング症候群、褐色細胞腫、偶発腫瘍の精査など一連の副腎疾患、原発性副甲状腺機能亢進症や低下症などの骨カルシウム代謝異常、難治性不整脈の患者さんなどを含め、是非、御紹介を賜りたいと存じます。先頃、琉球大学第二内科では沖縄県で初めての持続血糖モニターシステム（CGMS）を導入し、看護師、栄養士、薬剤師とのチーム医療体制のもと、糖尿病教育入院システムや“ブリットル型糖尿病”の治療モード最適化入院、超肥満患者に対する減量・教育入

院プログラムを充実させております。

Hospitalという名前の通り、病める患者さんが過ごされる病院に最も必要なものはHospitality、すなわち心が安らぐおもてなしのこころと快適性であります。琉球大学第二内科病棟（9階西病棟）には多和田久美子師長、山川房江栄養管理室長、砂川智子病棟薬剤師をはじめ、誠に素晴らしいスタッフが勢揃いしており、チーム医療の実践を通して“患者さんに優しく、こころがほのぼのと温かくなる居心地の良い病棟”を目指して一同、心を合わせ、日々の工夫と向上に励んでおります。守旧的、権威主義的な従来の大学病院のイメージは現在の第二内科病棟からは一掃されておりますので、是非、御気軽に患者さんの御紹介を賜りたいと存じます。必ずや、“変革の息吹”を感じ取って戴けるものと自負致しております。近未来には沖縄県の患者さんの調査等で沖縄県医師会の諸先生方の御力添えや御助言を賜る機会が一層、増えてくるものと考えております。沖縄県医師会の諸先生方におかれましては新生琉球大学第二内科への御支援と御引き立てを今一度、心より御願ひ申し上げます。

**Q6. 最後に、先生の座右の銘、日頃の健康法やご趣味などをお聞かせください。**

座右の銘：

生き残った種（しゅ）は強い種でも大きな種でもない。

（環境に適応して）変化（進化）を遂げた種だけだ。

（『種の起源』より。チャールズ・ダーウイン 英国（1809年～1882年））

日頃の健康法：

すべてに感謝。“有難う”という言葉をも多用する。イライラしない、慌てない。消化管に長く留まる雑穀米や野菜繊維を多く摂るように、また、身体を温めること、ゆっくり湯船に浸かる御風呂を心掛けています。沖縄の太陽エネルギーを受け取る日光浴からもたくさんのパワー

を戴いております。

趣味：

音楽と旅行。着任後の凄まじい忙しさから職場と住まいの往復のみで沖縄の名所・旧跡を訪れる時間が取れませんでした。これからはゆっ

くりと沖縄の文化を味わっていきたいと楽しみにしております。

この度は、インタビューへご回答いただき、誠にありがとうございました。

インタビューアー：広報委員 久場 睦夫

